

(別紙1)

尼崎市支え合いを育む人づくり支援事業 教育・研究活動事業実績報告書

教育・研究活動名	コミュニティインターンシップ-商店街からみる持続可能なコミュニティの検討-			
申請大学・高校等名	大学及び 高校等名	関西国際大学		
	活動 グループ名	福祉学専攻インターンシップ	参加学生 等人数	26人
指導責任者名 及び連絡先	学部・学科等 名称	教育学部教育福祉学科		
	責任者氏名	尾崎慶太	連絡先 電話番号	
	E-mail			
協働する市民活動団 体及び代表者名	団体名	企業組合はんしんワーカーズコープ、三和本通商店街振興組合		
	代表者氏名	代表理事 馬場 義竜	連絡先 電話番号	
	E-mail			
教育・研究活動 目標	<p>本授業は、尼崎の地域課題に取り組む市民活動団体はんしんワーカーズコープとの協働活動を通して、ソーシャルワークの基礎である住民主体の観点や人権感覚を養うことを目的とする。具体的には、当団体のコミュニティスペース地域共創Labを拠点に、三和本通商店街での活動を通して、地域課題の発見から住民と共に解決するプロセスを理解し、多角的・多元的な考え方をもち、大学での学びを血肉化することを目標とする。</p>			
活動内容及び 実績、評価	<p>【活動内容及び実績】 本プログラムは、2018年度および2019年度の活動内容を下敷きに、持続可能なまちづくりをテーマとして活動を進めた。これまで協働してきたはんしんワーカーズコープに加え、活動のフィールドである三和本通商店街の振興組合とも協力関係を築きながらのプログラム展開であった。2020年度は新型コロナウイルス感染症により、活動を制限せざるを得ない状況であったが、おおむね以下の2点の活動に取り組んだ。 1つ目は、三和本通商店街の各店舗における活動である。コミュニティインターンシップと称して取り組んだこの活動のねらいは、大学生が実際の店舗に入り、業務補助をとおして、店主/店員が抱く創業の歴史、商店街への思い、商店街の展望などを傾聴することであった。新型コロナウイルス感染症により、実際に協力いただいた店舗は3店舗および振興組合事務所であったが、主として12月中にのべ50名程度の大学生が活動に取り組むことができた。 2つ目は、1つ目の活動を補完するものとして、15店舗へのインタビュー調査を2月に実施した。学生が5つのグループに分かれ、それぞれ3店舗を訪問する形式とした。インタビュー項目は、1つ目を実施した活動で得た情報を頼りに、持続可能なまちづくりを基本コンセプトにしながら大学生が独自で検討を行った。 1つ目と2つ目の活動を行うことにより、商店街の店主/店員との関わりだけでなく、各店舗を利用する地域住民とも関わる機会を得ることができた。コロナ禍においても、感染症対策を進めながら、地域と接点をもつことで、商店街の過去-現在-未来にふれ、持続可能なまちづくりに大学生がどのように寄与できるかを考えることが可能になった。</p> <p>【評価】 ○想定していた活動成果に対する達成度合い(達成できたこと、できなかったこと等) 本プログラムは、過去2年間の実績をベースにしていることから、商店街(各店舗での活動および店舗へのインタビュー調査)は比較的スムーズに実施することができた。しかし、新型コロナウイルス感染症により、前期の活動が行えなかったこと、1月に2度目の緊急事態宣言が発令されたことにもない、大学生が課題発見を十分に議論できたとは</p>			

活動内容及び
実績、評価

いえない。ただし、これまでの活動とは異なり、より地域住民との接点をもつ活動へと転換したことで、商店街を起点とした持続可能なまちづくりを展開可能にするものであると認識している。このことは、協働しているはんしんワーカーズコープの理念にも合致しており、今後の発展が期待できる大学生の提案(別紙)となった。

○学生等が関わった地域、団体の活動の変化等

2020年度は商店街の各店舗に関わる活動を展開したことで、各店主/店員の思いが大学生によって吐露されたことがうかがえた。振興組合によって商店街の運営がなされているが、大学生という第3者が業務補助に携わったり、インタビュー調査を行ったりすることで、各店舗自身が創業の理念、これからの営業や商店街に対する想いを再確認する契機となったと感じる。新型コロナウイルス感染症によって活動は限定的であったが、広く商店街で活動したことにより、その地域に大学生が関わっているという意識を芽生えさせたことは、その地域を将来的に活性化させる原動力になるであろう。また、はんしんワーカーズコープから、地域福祉という広い視野からプログラムに対する助言を受けるだけでなく、当団体と相補的な関係性が生まれようとしていることは、本プログラムを次のステージへと発展させることを示唆していると思われる。

○学生等の学習意欲、地域に対する考え方の変化等

本プログラムの特徴は、学生自らフィールドワークを行い、そこで発見した問題点に対して、学生自らが解決策を検討し、実行するところにある。2019年度のふりかえりを踏まえ、改めて大学生自らが地域に入り込み、課題を発見するプロセスを重視して活動を進めた。参加学生のなかからは、ゼミでの研究レポートで商店街をベースにした地域福祉実践をテーマに取り上げるようになったり、防災サークルを立ち上げる準備を始めたりするなど、学習や課外活動への波及効果がみられている。今後は、フィールドでの活動と大学での学びを接続するような仕組みを構築することが急務であり、この点は指導教員としての課題にしたい。

※ 報告書の内容及び掲載写真は、市報、HP等の市の発行する媒体への掲載される場合がありますので、事前に学生等の同意を得た上で、提出をお願いします。

